

ね、この本よんだ？



2016年度



図書館で発行している『としょかん通信』でご案内した
「あたらしい子どもの本」のリストです。

絵本、読みもの、テーマ本の三つの柱にわかれた
ブックガイドとなっています。

紹介した本は、図書館で貸出ご利用いただけます。

このリストが、子どもたち、そして大人のみなさんにとっても
素敵な本との出会いのきっかけになりますように。



久留米市立中央図書館



『どんな いちにち』
くすのきしげのり／作
たしろちさと／絵
廣済堂あかつき



「おはよう」きょうはどんなひになるのかな？いちにちのはじまりにわくわくしながら、これからおこるたのしいことに、期待に胸をふくらませて、ようちえんへと向かう男の子。元気いっぱいにあいさつしながらにっこりとする男の子に、きょうはどんなことがまっているのだろうと、こっちまでわくわくしてしまいます。

『ちいさなりすのエメラルド』
そのだえり／作
文溪堂



ちいさなりすのエメラルドは、いつもねる前にうさぎのガーネットに本を読んでもらいます。でも、今日はガーネットが急な仕事でいません。自分でよもうと本を開くけれど、本は文字ばかりでよめないので、誰かによんでもらおうと外へ出かけていきます。夜おそい時間だけど、誰かおきてるのかな？エメラルドは誰に本をよんでもらうのでしょうか？

『いちばん しあわせな おくりもの』
宮野聡子／作・絵
教育画劇



森のはずれにあるふたつの家に、こりすとくまくんは住んでいます。こりすは、大好きなくまくんにおくりものをしたいけれど、くまくんは、なにもほしがりません。くまくんにしあわせなきもちになってもらいたいこりすは、くまくんに、どうすればうれしくなるの？なにをしたらしあわせなの？とたずねます。ふたりは、いちばんしあわせなおくりものを、見つけることができるのでしょうか。

『みつけてくれる？』
松田 奈那子／作
あかね書房



もうすぐ赤ちゃんが来てお姉さんになるはなちゃん。でもはなちゃんはまだ心の準備ができず、猫のクロとお外にかくれます。ところがお外に行くと、花や虫や動物たちがはなちゃんを元気づけてくれて、はなちゃんの不安が喜びへと変わっていくのです。あざやかな色彩と優しいタッチで はなちゃんの成長を描いた絵本です。

『たまこおばあちゃん たびにでる』
ませぎりえこ／作
偕成社



テレビでみたオペラにすっかりむちゅうになってしまったたまこおばあちゃん。「よし、きめた。わたしは、オペラのほんばへいくよ！」がいこくごをべんきょうし、ひこうきをとり、ふくもよういして、さあ、しゅっぱつ！ところが、ついたさきでいじなチケットがぬすまれてしまい…。はたして、ぶじにオペラをみることはできるのでしょうか？たまこおばあちゃんの、すてきなたびのおはなしです。

『ぼくのにいちゃん すごいやろ！』
くすのき しげのり／作
福田 岩緒／絵
えほんの杜



「ヘーイ ベイベ〜！」が口ぐせのぼくのにいちゃん。友だちのダイスケとマナブに言わせると「へなちょこ」で「ずっこけ」だつて。ぼくは弟としてはずかしい。でも大事な釣りざおを6年生にとられそうになったとき、ぼくらを守るために、にいちゃんは用水路のなかで立ちあがった！兄弟の優しい思いが伝わってきます。

『ごっこやさん』
ほそいさつき／作
くもん出版



もなちゃんと犬のしばたくんは、ごっこやさんをはじめました。ごっこやさんは、いろんなごっこあそびができるお店です。りすのしまこさんはおだんごやさんごっこ、ざりがにのアメリカちゃんはおはなやさんごっこをおねがいました。どろでおだんごを作ったり、はらっぱでお花を集めたり、ごっこやさんはおおいそがし。つぎは、どんなお客さんがくるかな？

『とうだい』
斉藤 倫／作
小池 アミイゴ／絵
福音館書店



みさきに1本のとうだいが新しくたちました。とうだいはまいにち海をながめます。暗い夜の海、魚が白く光る海、明け方、淡い桃色にそまる海。はるばる飛んできた渡り鳥とも友だちになり、遠くにのけしきを教えてもらいます。とうだいがながめる海の繊細な表情や、とうだいが想像する遠くにの風景が画面いっぱい広がっていく絵本。ゆっくりとページをめくりたくなる1冊です。

『くうちゃんのホットケーキ』
わたなべゆうこ／文・絵
ポプラ社



くうちゃんはママと一緒にだいたい好きなホットケーキをつくります。じぶん一人でつくりたかったくうちゃんですが、失敗したのを見かねたママが手伝ってしまい、くうちゃんはおこってしまいます。すると、しゃべるホットケーキがくうちゃんの前にあられ…。おいしいホットケーキの、ちよっぴりおかしくてたのしいおはなしの絵本です。

『ゆきのしたのおともだち』
ばんたくま／作
くもん出版



「あーあ。ふゆなんてつまらないや。」ゆきのしたにすむウサギが、たいくつしていると、とつぜんウサギのいえにモグラがひょっこりあらわれました。ウサギが、あなをほってみんなとあえるモグラくんはいいなあという、「それならいっしょにあなをほればいいのさ。」とモグラくん。ゆきのしたですぐすどうぶつたちの、たのしいふゆのはじまりです。

『だれのおとしもの？』
種村有希子／作・絵
PHP研究所



雪がふった日の朝、まほちゃんは「ゆり」と名前をついたてぶくろをひろいました。落とし物を届けるためにあしあとをたどっていくと、マフラーにセーター、ネックレスに風船、くだものも落ちていきます。まほちゃんは、無事にゆりちゃんに落とし物を届けられるでしょうか？冬にぴったりのおはなしです。

『は・は・は』
せな けいこ／作・絵
廣済堂あかつき

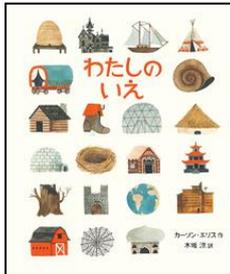


「は」「ば」「ぼ」の文字で始まる言葉がたくさん出てくる言葉遊びの絵本です。『ねないこだれだ』の著者、せなけいこさんの37年前の作品が今回初めて単行本になりました。はなちゃんという女の子が、ぱんや、はむえつぐに、はちみつをかけて、はちみつたべすぎ、むしばになって、はいしゃにいこうと、ばすをまっていると…。思いがけないラストも楽しい1冊です。

えほん(海外)

『わたしのいえ』

カーソン・エリス／作
木坂涼／訳
偕成社



世界中のあらゆる家が、次々と出てくる絵本です。田舎の一軒家や、街中のデパート、船のお家や豪華な宮殿。家といっても人間の家だけではなく。蜂の家や森の動物の家、小人の家や神様の家、月の住人の家まで出てきます。それぞれの家での楽しい暮らしぶりを、美しいデザインで描きます。あなたはどの家に住んでみたいですか？

『だれかぼくをぎゅっとして！』

シモーナ・チラオロ／作・絵
おびかゆうこ／訳
徳間書店



ちいさなサボテンのこどものサボタは、いろんなサボテンたちといっしょにくらしていました。サボテンたちは、りっぱなサボテンになれるようにいろいろおしえてくれましたが、だれもサボタをだきしめてはくれません。だれかにだきしめてもらったサボタは、あたらしいなかまをさがすたびに。さてサボタはそのだれかにであえるでしょうか？

『あかいかばんのひみつ』

エマ・アレン／文
フレヤ・ブラックウッド／絵
木坂涼／訳



学校にもっていくかばんのことで、モニカはすごくおこっています。ロケットのついた新しいリュックがほしかったのに、おかあさんがだしてきたのは使いふるした赤いかばん。「このかばんにはひみつのちからがあるの」とおかあさんはいつていたけれど…。さて、赤いかばんをもったモニカに学校でなにがおこるのでしょうか？

『おしっこおしっこ』

E・シャドウール／作
V・オスタ／訳
クレヨンハウス



ペンギンのレオンは、夜中におしっこがしたくなると、ママやパパを起こしてトイレに連れていってもらいます。だからママもパパも、朝はとつても眠たそう。ある日レオンは、ママから大きくなったら一人でトイレに行くのよ、と言われました。その夜、またおしっこがしたくなったレオンは、一人でトイレに行けるでしょうか？

『300年まえから伝わる とびきりおいしいデザート』

エミリー・ジェンキンス／文
ソフィー・ブラッコール／絵
あすなる書房



ブラックベリーと生クリームと砂糖で作るブラックベリー・フル。16世紀から現代まで世界中で作られているデザートです。1710年・1810年・1910年・2010年の4つの時代にクローズアップし、ブラックベリー・フルがどのように作られていたかを覗いていきます。泡立て器がなかった時はどうしていたの？冷蔵庫がない時はどこで冷やすの？最後にはブラックベリー・フルのレシピも付いています。

『がらくた学級の奇跡』

パトリシア・ポラッコ／作
入江真佐子／訳
小峰書店



トリシャは識字障害をもつ女の子。そんな自分のことを知る人がいない新しい学校での新学期を楽しみにしていました。しかし、入ることになったのは『がらくた学級』と呼ばれる変わった子たちが集まったクラス。トリシャはがっかりしますが、ピーターソン先生にはげまされ、クラスメイトと一緒に少しずつ自分達の可能性を信じて目標へと走り出します。がらくたから生まれた奇跡のおはなしです。

『みどりのトカゲとあかいながしかく』

スティーブ・アントニー／作・絵

吉上恭太／訳

徳間書店



みどりのトカゲとあかいながしかくは、おたがいをおしてやろうとたかっています。「ねえ、なんのためにたかっているの？」とみどりのトカゲの一匹は尋ねます。でも、その声はどこにも届きません。そして長いたかひのすえに「たかひはもう、うんざりだ」とあかいながしかくのひとつが言いました。たどり着いた結末は？

『パパとママのつかいかた』

ピーター・ベントリー／ぶん

サラ・オギルヴィー／え

福本 友美子／やく

BL出版



パパとママって、はみがきしなさい！とか、さっさとかたづけて！とか、いつもうるさいよね。だけどね、そんなふたりも、うまくつかえば、なかなかべんりなんだよ。こわれたおもちゃをなおしてくれるし、けがをしたらテーブをはってくれる。おえかきちょうになるし、きのぼりのきにもなる。ほらね、べんりでしょ？子どもはもちろん、パパとママにも楽しい絵本です。

『ぼくはちっともねむくない』

クリス・ホートン／作

木坂 涼／訳

BL出版



お日さまが西の空に沈むと、森のみんなのまぶたも重たくなってきます。「ぼくはちっともねむくない」とがんばっていたクマの子も、だんだん眠たくなってきて…。森の中の小さな動物から大きな動物までがゆったりと眠りにつく様子を描いた絵本です。最後のページは森を包むような一面の星空が広がります。みずみずしい紫を基調にした鮮やかな色彩が印象的な1冊です。

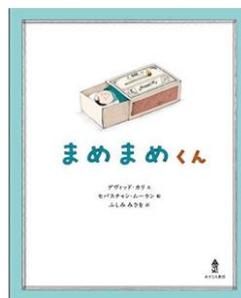
『まめまめくん』

デヴィッド・カリ／作

セバスチャン・ムーラン／絵

ふしみみさを／訳

あすなる書房



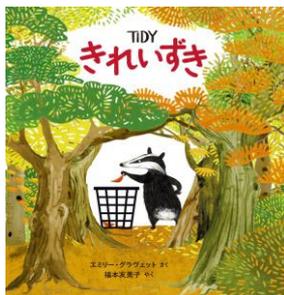
まめまめくんは、マッチ箱がベッドになってしまうくらい小さいおとこのこ。元気いっぱい育ったまめまめくんでしたが、学校へ行くようになり、周りに比べて自分がとても小さいことに気づきます。そんなまめまめくんも大人になって仕事にも行くようになりました。一体何の仕事ができるのかって？ぜひ当ててみて下さい。まめまめくんにぴったりの仕事を見つけたんですよ。

『きれいずき』

エミリー・グラヴェット／作

福本友美子／訳

フレーベル館



あなぐまのピートは、おそうじやかたづけがだいとくい。森でいちばんのきれいずきです。お花畑で毎日のびすぎた葉や花をととのえ、きつねのしっぽをとかし、鳥たちも洗ってあげます。ちらかった小枝を見つけたら、すかさずおそうじ。秋になり落ち葉がまいる季節になりました。さて、きれいずきなピートのとった行動とは？

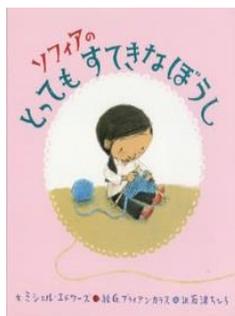
『ソフィアのとってもすてきなぼうし』

ミシェル・エドワーズ／文

G・ブライアン・カラス／絵

石津ちひろ／訳

BL出版



ソフィアのもこもこのねこぼうしとおそろいのでぶくろは、おとなりのゴールドマンおばちゃまが編んでくれたもの。でも、おばちゃまは他の人のぼうしを編むのに忙しくて、自分のぼうしを持っていません。そこで、ソフィアはおばちゃまのために内緒でぼうしを作りはじめます。せかいでいちばんすてきなぼうしは、無事に完成するでしょうか？

読みもの(日本)

『ショクパンのワルツ』 ながすみつき／著 フレーベル館



いじめられっ子のユウキは、小学校からの帰り道に一匹の子犬と出会います。神社で食パンを食べていたその子犬に「ショクパン」と名前をつけて、ご飯を持って行ったり、リコーダーでショパンの曲を吹いてやったりと心を通わせていきます。しかし、クラスメイトたちはそれを許してはくれませんでした。ショクパンと出会ったユウキの、闘いと成長の物語です。

『ポンちゃんはお金もち』 たかどの ほうこ／作・絵 こぐま社



今日は移動遊園地がくる日。コータは楽しみにしていたのに、テストの点が悪かったので部屋で問題集をしなければいけません。そんなとき、ポンちゃんという知らない男の子が、コータをこっそり連れ出します。二人はポンちゃんのおこづかいで、移動遊園地を思う存分楽しみますが、さて、ポンちゃんの正体とは…？ カラー挿絵も楽しめる1冊です。

『ケンガイにっ！』 高森美由紀／作 加藤 休ミ／絵 フレーベル館



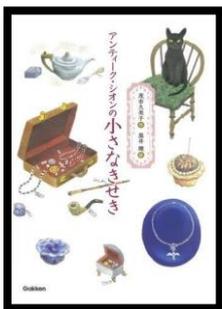
俊は、オンラインゲーム漬けの日々を送る小学五年生。みかねた親に、夏休みのあいだおばあちゃんちに行くように言われてしまいます。ついた先は、スマホも言葉も通じないまさに“ケンガイ”の土地で…。おばあちゃんの手料理を食べながら、友達と遊ぶ日々は、俊を少しずつ変えていきます。「こらがらだな」、おばあちゃんの言葉が優しく響くおはなしです。

『雨の日のせんたくやさん 森の小さなおはなし』 にしな さちこ／作・絵 のら書店



雨の日だけ、お店をひらくかたつむり。せんたくものをほすかわりに、お洋服にあったかおりのついた雨水にぬらしてきれいにしてあげるのが仕事です。お客さんの気持ちによりそい、ぴったりのかおりをさがすかたつむりの日常を描いた表題作を含む、森のかたすみでくらす小さないきものたちの6つのおはなしです。

『アンティーク・シオンの小さなきせき』 茂市 久美子／作 黒井 健／絵 学研プラス



町から離れた森の中に、アンティーク・シオンという骨董店があります。店のあるじは、年を取っているのか、若いかわからない、魔女のような女性です。店に並んでいる骨董品は、あるじが遠い外国を旅して「連れてきた」もの。「集めてきた」なんて言葉は使いません。あるじは、骨董品にはお客さん呼び寄せの力があると云います。すこし不思議であたたかい、小さなきせきのお話です。

『金色の流れの中で』 中村 真里子／作 今日 マチ子／画 新日本出版社



1964年、小学6年生の木綿子の前に現れた和也は、2030年の未来から来た青年でした。木綿子は父親が戦争中に人を傷つけた事実を知ってひとり悩みますが、和也に話すと「君に責任はないよ、まだ」と言われます。和也や家族との会話を繰り返しながら「あたしは、殺さない」と決意するまでの木綿子の気持ちを描くタイムファンタジーです。

『駅鈴(はゆまのすず)』

久保田香里／作
坂本ヒメミ／画
くもん出版



奈良時代、律令国家と呼ばれた日本では、馬を使って中央の命令を地方に伝えるために「駅屋(うまや)」が置かれていました。駅屋の娘、小里は祖父や父のような駅子(うまやのこ)にあこがれる女の子。女がなれるわけがないといわれながらもあきらめず、戦や駅屋の危機、地震などに翻弄されながらも駆け抜けた少女の物語です。

『落語少年サダキチ』

田中啓文／作
朝倉世界一／画
福音館書店



主人公の少年、忠志(ただし)は、お笑いの大好きな五年生。ある日、町で若者にかからまれている落語家・笑酔亭粹梅を助けたことから落語『平林(たいらばやし)』を聴かされることになり、すっかりその魅力にとりつかれてしまいます。そしてついには自分自身も落語を演ることに！落語と忠志の時空を超えた活躍が楽しい物語です。

『王様に恋した魔女』

柏葉幸子／作
佐竹美保／絵
講談社



むかし、国で戦いが起こったとき、杖をふるって魔法をつかい、国を守った魔女がいた。その魔女は杖殿と呼ばれ、どの国も杖殿として魔女を欲しがるようになった。魔女には、魔女として魔法をつかうものや、魔法をつかわず人間の女として暮らしているものがいた。町から出ていくもの、国を守るもの、王様と恋をするものも。それぞれの魔女の生き方を描いた物語です。

『あかりさん、どこへ行くの?』

近藤 尚子／作
江頭 路子／絵
フレーベル館



ある日、冷蔵庫を開けたら中に靴が入っていた。ぼくのおばあちゃん「あかりさん」が入れたみたいなんだ…。突然認知症になった祖母を前に、家族はとまどいながらも寄り添う方法を少しずつ見出していきます。著者の実体験をもとにした家族の物語。

『スパゲッティ大さくせん』

佐藤まどか／作
林ユミ／絵
講談社



あきは、料理が好きな小学生の男の子。キッズシェフコンテストで入賞するために、課題の「かんそうパスタを使ったりょうりを練習しますが、うまくいきません。困っているとパスタの精があらわれて…。果たして「スパゲッティ大さくせん」はうまくいったのでしょうか？巻末には、スパゲッティの作り方もっているので、ぜひ挑戦してみてください。

『銀杏堂』

橘 春香／作・絵
偕成社



小学1年生のリンちゃんはずっと気になっていた場所。それは骨董品を扱うお店「銀杏堂(ぎんなんどう)」。そこに並ぶのは店主の高田さんが世界中を旅して手に入れた幻の品ばかり。巨大なにしき鯉のうろこ、稲妻のかけら、ユニコーンののどにつかえていたエメラルドなど。美しい骨董と、それにまつわる人生の思い出と冒険の物語を高田さんがリンちゃんに語ります。

読みもの（海外）

『さかさ町』

F・エマーソン・アンドリュース／作
ルイス・スロボドキン／絵
小宮由／訳 岩波書店



リッキーとアンは何時間も汽車に乗って、遠くに住むおじいちゃんの家に向かっていました。ところが途中の橋がこわれてしまって、汽車は近くの「さかさ町」まで戻ってきたけれど、この町はなんだか他の町と雰囲気違います。看板もさかさま、お家もさかさま、働いている人も大人ではなく子どもと、なんでもさかさまです。二人は無事おじいちゃんに会うことができるのでしょうか。

『賢女ひきいる魔法の旅は』

ダイアナ・ウィン・ジョーンズ &
アーシュラ・ジョーンズ／作
田中薫子／訳 佐竹美保／絵 徳間書店



ある日、エイリーンは、賢女になるための儀式で失敗してしまい、ひどく落ち込んでいました。そんな時、大王の命令でベック叔母さんと一緒に、さらわれた皇子を救出する旅に出ることになります。旅を進めるうちに次々と仲間が増えていきますが、叔母さんが呪いをかけられてしまい、エイリーンが一行をひきいるはめに。無事に、皇子を見つけ出すことができますでしょうか。

『霧のなかの 白い犬』

アン ブース／著
杉田 七重／訳
あかね書房



祖母が飼い始めた子犬にジェシーは大喜び。ところが祖母が認知症になり、過去の記憶に怯えるようになります。それはある「区別」の記憶でした。祖母の代わりに犬を預かったジェシーも、身の回りの区別に気づき始めます。純血犬と雑種、健常者と障害者、町の外国人労働者。ジェシーが体験した区別と祖母が体験した区別が交差しながら、祖母の記憶の謎が解かれていきます。戦争の悲しみを描く物語。

『十三番目の子』

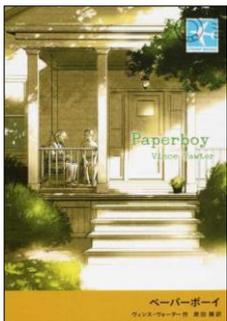
シヴォーン・ダウド／作
パム・スマイ／絵
池田真紀子／訳
小学館



村に古くから伝わる掟(おきて)によれば、一人の女が産んだ十三番目の子は、十三回目の誕生日に暗黒の神ドンドに生け贄(にえ)として捧げられる。その子の命と引替えに村は十三年の繁栄が約束されるという。ダーラは、まさにその十三番目の子でした。誕生日を前日に控えた夜、衝撃の真実を知ったダーラと、その家族の物語です。

『ペーパーボーイ』

ヴィンス・ヴォーター／作
原田 勝／訳
岩波書店



野球の得意な少年ヴィクターは、ある日、友だちの代わりに新聞配達をすることになりました。すぐに言葉が出てこないせいで会話が苦手なヴィクターが、新聞配達を通して近所の個性的な人たちと出会い、関係を深めていきます。吃音を克服した著者が自身の経験元を執筆した作品です。2014年度ニューベリー賞佳作作品。

『ミスターオレンジ』

トゥルース・マティ／作
野坂悦子／訳
平澤朋子／絵
朔北社



1943年、第2次世界大戦中のニューヨーク。主人公ライナスの家は八百屋を営んでいる。配達の手伝いをするうちにオレンジを注文する画家と親しくなり、ライナスは彼を「ミスターオレンジ」と呼ぶように。三原色で未来を描こうとする画家のアトリエに魅了され、新しい「未来」や想像力の本当の価値を考え始めた少年の物語です。

『バクのバンバン、町にきた
ふたりはなかよしマンゴーとバンバン』

ポリィ・フェイス／作

クララ・ヴリアミー／絵

松波佐和子／訳

徳間書店



マンゴーは、なんでもできるかしこい女の子。ある日、マンゴーは横断歩道にうずくまっているバクの子を見つけました。バンバンというバクの子は、ジャングルから出て町にやってきたけれど、トラがこわくて動けないと言います。そこで、マンゴーはバンバンを家に招待することになりました。元気な女の子マンゴーと、ちょっぴり怖がりなバンバンのたのしいお話です。

『ミュージアムに スフィンクスがやってきた』

ジュシー・ハートランド / さく

志多田静 / やく

六耀社

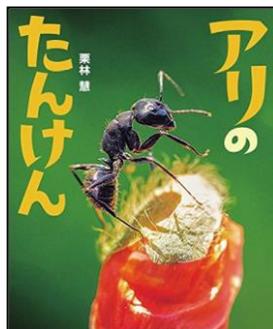


ニューヨークのメトロポリタン・ミュージアムには、何千年も昔のエジプトで作られたスフィンクスがあります。この像は、作られて20年ほどで壊されてしまい、何千年の間ほうりすてられていたものでした。いったいどうやってミュージアムにきたのか、どんな人たちが関わって今ここにそのスフィンクスがあるのか、わかりやすく教えてくれる絵本です。

『アリのたんけん』

栗林慧 / 写真

小学館



わたしは、クロオオアリ。家族のために、おいしいごはんを探しにいこう。アリのわたしから見ると、バッタもトンボもダンゴムシも、とっても大きいの。カマキリに出会ったり、カブトムシのけんかを見たりしながら、ごちそうを探してたんけんするよ。アリの目線で撮影された、大迫力の昆虫の写真絵本です。

『レシピにたくした料理人の夢』

『難病で火を使えない少年』

百瀬しのぶ / 文

汐文社



だんだん体が動かなくなってしまう難病「脊髄小脳変性症」。母がそうであったように、自分もその病気にかかっていると知った少年は、絶望のどん底におとされます。そんな中、好きだった料理や支えてくれる人たちの中で少しずつ前向きになっていった少年は、できないことが増えていく中で、形を変えながらも夢を追いかけていくようになります。たくさんの可能性をみせてくれる物語です。

『世界中からいただきます！』

中山茂大 / 文

阪口克 / 写真

偕成社



世界中を旅する二人の日本人が、各地の食事をレポートします。モンゴルの羊肉のむし焼き、ネパールのカレー定食ダルバート、ハンガリーの川魚スープ、タイのドリアンごはん、モロッコのタジン鍋……。それぞれの地域の台所や、食卓を囲む家族の様子まで豊富な写真で紹介していきます。食事を通じて世界の文化やくらしが見えてくる1冊です。

『けん玉道の師』

おち まさ子 / 著

PHP研究所



みなさんは、けん玉がどうしてここまで広がったのか知っていますか？けん玉は、学校でも取り入れられ、全国大会や世界大会も行われていますが、ここまで広がったのはここ数十年のことで、そこにはけん玉を普及してきた藤原一生という立役者がいたからでした。どうやってけん玉は、世界まで広がっていったのか？一緒にそのおはなしをのぞいてみませんか？